

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	吉田満穂
2. 審査委員	主 査：(岡山大学教授) 西山 修 副主査：(鳴門教育大学教授) 田村 隆宏 委 員：(鳴門教育大学教授) 久我 直人 委 員：(岡山大学教授) 吉利 宗久 委 員：(岡山大学教授) 片山 美香
3. 論文題目 保育実践における気付き体験に基づく保育者の変容過程と力量形成	
4. 審査結果の要旨 先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 吉田満穂 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和3年7月10日（土）13時30分～14時00分 場所：Zoomによるオンライン実施 1. 学位論文の構成と概要 第1章 研究の範囲と位置付け 第1節 研究の背景と保育実践における保育者の気付きの意味 第2節 用語の統一と倫理的配慮 第3節 研究目的と内容構成 第2章 保育者の自伝的記憶としての気付き体験とそれに伴う変容過程 第1節 保育経験年数から見た気付き体験の特徴 第2節 中堅保育者の自伝的記憶としての気付き体験と変容過程の質的分析 第3節 中堅保育者が語る自伝的記憶としての気付き体験の量的分析 第3章 保育者の気付きと力量形成を促す支援方法の提案 第1節 保育実践における気付き体験と保育者効力感との関係 第2節 保育者の気付き体験を活かして効力感を高める保育者支援プログラムの開発 第3節 保育者の気付き体験を活かして効力感を高める保育者支援プログラムの実施と検証 第4章 研究の総括と今後の展望 第1節 保育者の気付き体験の特徴と変容過程 第2節 支援プログラムの開発と保育者の変容 第3節 今後の課題と展望 引用文献 資料	

保育者は保育実践の中で、瞬間的に子どもの状況や心的状態を察知したり、保育後の振り返りから捉え直したりして、その後の援助や指導に繋げている。保育者自身によるこうした捉えは、日常的に「気付き」と呼ばれ、保育の質向上にも重要である。一方、保育者は日常的に気付きという語を使用しているにもかかわらず、用語・概念として十分に検討され、理解されてきたとは言い難い。そこで本研究では、まず気付きに関わる先行研究の整理と研究の定位を試みた。次に、保育者の自伝的記憶としての気付き体験に関する量的・質的分析から、実証的な知見を導いた。その上で、保育者の気付きに働き掛け、保育者の成長や力量形成に繋げるための支援プログラムを開発し、その効果を検証した。その際、保育実践への自信や見通しに関わる保育者効力感、及びその関連変数に着目し、効果的な保育者支援の方法を提示することを目指した。

本研究全体は、4章構成である。第1章では、まず第1節において研究の背景を述べ、保育の質向上に関する今日的課題を示した。保育の振り返り、子ども理解、保育者の熟達化の視点から先行研究を概観し、保育者の気付きが研究上どのように位置付けられるかを示し、今後、気付きを学術研究として扱うための基礎とした。第2節では、用語の統一、及び倫理的配慮について記した。第3節では、研究目的と内容構成を記し、本研究の全体像を説明した。

第2章は、実証的な研究により各節が構成される。ここでは、保育者の自伝的記憶としての気付き体験に着目した。具体的には、保育者の気付き体験を広く収集し、量的・質的分析を行い、考察を加えた。第1節では、保育者が自伝的記憶として、何を気付きと捉え、記憶しているかを調査し、保育経験年数による特徴を分析した。初任、中堅、熟練に分け検討したところ、共通の特徴と相違が明示された。第2節では、面接法により中堅保育者の語りを収集し、質的に分析した。その結果、保育者の気付きの契機が見出され、気付きとそれに伴う保育実践の変容過程が明らかになった。気付きに働き掛けることで保育者の変容を図り得る可能性が示された。第3節では、中堅保育者の語りの特徴について量的分析（テキストマイニング、階層的クラスタ分析）を行った。その結果、各保育者の気付き体験は多様でありながら、共通に語られる語があることなどが示された。これらより、気付き体験に働き掛ける支援について端緒を得た。

第3章は、保育者の自伝的記憶としての気付き体験を活かし、保育者効力感を高める保育者支援プログラムの開発を行い、その効果を検証した。第1節では、保育者の気付き体験と保育者効力感との関係を実証し、考察を行った。気付き体験を挙げることが出来る保育者は、確かに保育者効力感が高いことから、気付き体験に働き掛け、保育者効力感を高め、保育者の変容に繋げる可能性が示唆された。第2節では、ここまで得られた知見を総合し、保育者効力感を高める支援プログラムを新たに開発した。第3節では、第2節で開発した支援プログラムを実施し、その効果を検証した。その結果、保育者効力感、及び保育者効力感に関わる諸変数において、フォローアップ後に有意な上昇が見られた。その効果は、フォローアップから1か月後の追跡においても確かに維持されており、支援プログラムの有効性が確認された。

第4章は、第1章から第3章までの研究成果を整理し、総括すると共に、今後の課題、及び展望を提示した。第1節では、保育者の気付きの特徴と変容過程に関して、得られた知見を整理し、考察を加えた。具体的には、先行研究から得られた気付きの特徴と、保育者の気付き体験から得られた特徴、及び中堅保育者の気付き体験の変容過程等を整理し、気付きの変容と深まりに関して考察を加え、モデル図を提示した。第2節では、保育者の気付き体験と保育者効力感との関係を捉えた上で、支援プログラムを開発、実施した結果について改めて検証し、保育者の変容と支援プログラムの効果を関連させ考察を加えた。支援プログラムにおいて保育者効力が高まることと保育者の意識変容は相互に関連しているという示唆を踏まえ、支援プログラムの流れと保育者の意識変容に関わるモデル図を提示した。最後に、第3節では、本研究における今後の課題を示した上で、気付き体験に働き掛ける支援プログラムによる保育者支援の展望を論じた。

2. 審査経過

本論文の主要部分は、3編の査読付き学術論文として、全国学会誌である『応用教育心理学研究』（第一著者、日本応用教育心理学会誌2017）、同誌（第一著者、日本応用教育心理学会誌2021掲載予定）、及び『教育実践学論集』（第一著者、兵庫教育大学大学院2018）から成る。これらの研究成果と内容につき審査を踏まえ、5名の審査委員が留意して討議した諸点は、以下の通りである。

(1)研究目的と論文構成の整合性について

本論文は、保育現場で日常的に使用される気付きに焦点を当て、保育者の気付き体験を活かした支援プログラムを独自に開発し、具体的な支援の手立てを提供することを研究目的としている。論文構成は、本目的に沿って、先行研究を整理した上で、気付き体験の特徴及び、保育者効力感との関係の分析を踏まえ、支援プログラムの開発、実施、分析、考察の上で、保育者の力量形成への支援を論考する流れである。したがって、研究目的に整合する妥当な論文構成であると認められる。

(2)先行研究の概観と考察に使用された資料の扱いについて

先行研究の概観では、幼児教育・保育領域に関わる学術的研究から気付きの概念を抽出し、丁寧に整理、考察している。また、実践データ分析においても近接領域や国内外の文献を十分に網羅している。支援プログラム作成等に使用した資料にも、引用に十分留意して取り扱っている。倫理的配慮も問題ない。よって、研究資料の質・量、扱い方ともに学位論文の水準にあると判断できる。

(3)分析と考察における客観性及び論理的な文章表現について

分析と考察においては総じて、主観的な記述を排除し、科学的な解釈や論理的な文章表現への配慮が認められる。分析では適宜、分散分析等による検定、記述データの量的分析、及び質的分析を行い、客観的な分析に努め、研究の再現性、妥当性、信頼性を高めている。また考察では、先行研究や関連領域の知見を十分踏まえながら、深い論考が行われている。論の運び方は明快であり、得られた結果から、納得がいく合理的な結論を導くことができている。

(4)教育実践学の学位論文としての独創性及び発展性について

保育者支援の実践開発は喫緊の課題であるが、実証的研究及びそれに基づく実践開発は十分とは言いがたい。本論文は、保育者が保育実践の中で持つ、自伝的記憶としての気付き体験を活かし、保育者効力感を高めることのできる支援プログラムを開発した。プログラム参加者の気付き体験や保育実践の変容モデルも示し、実践継続による力量形成に資すると言える。よって教育実践学の観点からも独創性に長けており、今後の発展が期待できる。

(5)学位に学校教育学を付記する根拠としての学校教育実践への貢献について

幼児教育・保育の質保証のために、保育者の力量形成は喫緊の課題となっている。本論文は、これに資する独自の支援プログラムを提供した。気付き体験、保育者効力感等の関連変数の実証的検討を踏まえ、保育者の気付き体験の変容過程、及び支援プログラム参加者の保育への意識や実践変容が示されたことで、今後、保育者の熟達化へ向けた力量形成が期待できる。以上により本論文は、学校教育実践へ貢献する成果が認められ、学校教育学の発展に寄与する論文と言える。

3. 審査結果

以上により本審査委員会は、吉田満穂の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。